

ねじれた自己欺瞞から信念の行方をさぐる

太田 雅子 (Masako OTA)

お茶の水女子大学

自己欺瞞は通例、不合理な信念の一種とされている。自分が末期の胃ガンであり余命いくばくもない (p) と信じながら、じきに回復して日常生活に復帰できる ($\neg p$) と信じこむという態度は明らかに矛盾しており、両方の信念を文字通りに解するならば、私たちはそのような信念をもつ人を不可解かつ不合理であると見なさざるをえないだろう。自己欺瞞については様々な定式化がなされているが、それらにおいておよそその一致をみているひとつの特徴は、「自己欺瞞とは、手持ちのあらゆる証拠が p が真であることを示しているにもかかわらず（そして自己欺瞞者本人にもそのことを理解する能力があるにもかかわらず）、 p とは相容れない $\neg p$ を裏付ける証拠を重視し、その結果 $\neg p$ を積極的に信じようすること」というものである。それ以外の点ではある程度合理性を期待できる人がどうしてこのような信念の歪曲を行うのか、またそれがいかにして可能となるのかという自己欺瞞特有の謎を解明することは、人間の信念の合理性が破られるのはどのような場合なのかの分析を可能にする。そして、その原因を追究することにより、合理性がいかにして可能であることを示すことにつながると思われる。

しかし、たとえ上のような試みが発現したとしても、さらなる難問が待ち受けている。それが今回の提題となる「ねじれた自己欺瞞(*twisted self-deception*)」の問題である。「ねじれた自己欺瞞」という名称は Mele による命名で、先に挙げたような楽観主義的自己欺瞞とは逆に、自分にとって都合の悪い信念によって自分を欺こうとする信念のあり方を指す。先の例を改変するならば、病院の検査で胃潰瘍であると診断され、その検査結果の開示もなされたにもかかわらず、「自分は本当は末期の胃ガンで、医師はそれを隠蔽しているのだ」と信じようとする態度のことをいう。

自己欺瞞に意図性を認めず、欲求などが動機となって生じると主張する立場（動機説）にとって、ねじれた自己欺瞞の存在はとりわけ難題となると思われる。自己欺瞞の動機を形成する欲求の対象は、自分にとって望ましいことであるのが普通である。ゆえに、通常の（楽観主義的な）自己欺瞞の動機説による説明は受け入れやすい。だが、もしその人自身にとって望ましくないことを欲する人を目にしたら、私たちは「そのような欲求をもつには何か事情があるはずだ」という推測なしにその人の欲求を理解することは困難である。ましてや、ねじれた自己欺瞞者は、望ましくない欲求から生じる信念によって、実際には望ましい状況にあるという信念を打ち消そうとしているのである。欲求の内容が当事者にとって望ましいものではないというだけでも不可解であるのに、そのような欲求を動機とした信念によって、その状況において無理なく成り立っている信念を捻じ曲げるなどということがなぜ生じるのか、なおさら説明が必要となるだろう。

しかし、Eric Funkhouser によれば、自己欺瞞者は自分の信じたいことを信じていない。すなわち、自己欺瞞者は自分が p と信じていると「誤って」信じており、自分の信念に対する二階の信念は、信念者が本来もっている信念とは異なっている。すなわち、自己欺瞞は、その結果となる信念がポジティブかネガティブかに関係なく、その本性上ねじれているのである。さらに Funkhouser は、自己欺瞞者が p と $\neg p$ の矛盾よりもさらに複雑な「自分が何を信じているのかわからない」という事態に陥っている事例があると指摘する。そして、信念の内容が信じたいことと異なっている事例の分析から、Funkhouser は信念の対象となる事実(fact of the matter)の存在そのものを疑問視し、代わりに、何かを信じるということ「真であると見なす」という態度に置き換えたうえでの自己欺瞞分析を推奨している。Funkhouser のこの姿勢は、信念は志向的对象をもつという理解に基づいたフォークサイコロジーの根幹を揺るがしかねないものであると言える。

本報告では、Funkhouser の主張に対して二つの問題を提起したい。ひとつは、「信じたいことを信じられない」あるいは「自分が何を信じているのかわからない」という現象が、はたして信念の「対象」の否定に結びつくのか、もうひとつは、その信念の対象が存在しないということはフォークサイコロジーの限界を示すものであるのかという疑問である。結論を先取りするならば、「信じたいことを信じられない」という Funkhouser の診断は、自己欺瞞の実情をかなりの部分まで捉えてはいるものの、この主張を「信念の対象の非存在」に結びつけるのは性急である、ということ立証することになるだろう。信念の対象が何であるかは、私たちの信念の合理性を判断する上で不可欠であるがゆえに、その存在を否定することは合理性の判断においてリスクが大きく、フォークサイコロジーの枠組を損なわない範囲で自己欺瞞を捉えることは依然として可能である以上、信念のあり方に関しては、Funkhouser のラディカルな立場をただちに受け入れる必要はないということを示したい。